

特集 試される宗教リテラシー

座談会 宗教者としての幸せと リテラシーを育む子弟教育

岡田正彦¹・小平美香²・林田康順³

司会 弓山達也⁴

2023年8月21日実施(於 大正大学)

宗教リテラシーは、通常、一般の人間が宗教文化への知識や理解を有することに関わるものとして位置づけられるが、宗教者の家庭で生まれ育ち、その継承を求められることもある子弟の場合はどうだろうか。今回の座談会では、それぞれ天理教・神社神道・浄土宗の宗門校大学において子弟教育に携わっている3名の方に、これからの子弟教育をより豊かなものにしていくために大事なものは何か、各大学のカリキュラム編成、地域社会との関わりやいわゆる2世問題などにも触れながら、語っていただいた。



- ¹ おかだまさひこ : 天理大学人間学部教授、天理教富良野分教会きょうと教人
² おだいらみか : 学習院大学文学部講師、ときわ台天祖神社宮司
³ はやしだこうじゅん : 大正大学仏教学部教授、浄土宗慶岸寺住職
⁴ ゆみやまたつや : 東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授

宗教者になるまで

弓山 今回の座談会で取り上げる子弟教育は、いわゆるミッション系と呼ばれているような学校で行われる宗教者としての学生教育で、一般の非宗教の学生を念頭に置いた宗教教育に比べると、かなり違っており、なおかつ見えづらいところもあるかと思います。実際私も、大正大学の鷺見定信先生¹⁾ (2010年遷化) が「子弟教育は難しいのよ」というお話をなされたのをきっかけに、2004年に「現代における宗教者の育成」というシンポジウム²⁾を開くまで、こういうことが問題になっているんだということを十分に認識していませんでした。例えば、後継者が減少しているなかで、どう先細りさせず、かつ優秀な人材を育成するのか。そこには当然学力の問題、信仰心やモチベーションの問題、家庭が宗教の場なわけで、どのような環境で育てられてきたかなど、ナイーブな問題とからんできます。大学以外の教団内の教育機関・養成講座でも資格を取れるなかで教団立の大学に入ることにはどういう意味があるか、という問題もあるでしょう。“一度宗教者の資格を取ったら終わり”ではないフォローアップやリカレント教育も射程に入るかもしれません。

昨年、安倍首相襲撃事件の後に2世問題が大きく社会的にクローズアップされて、子弟教育は時にネガティブに語られている傾向があるのではないかと思います。つまり、お寺の家に生まれたから自動的に大正大学に入って資格を取って法統を継ぐ、というようなことが当たり前だった時代がずっと続いてきたわけですがけれども、お寺も天理教の教会もお宮さん(神社)も、宗教の家庭に生まれたからそのまま宗教者にならなければいけない、ということに対し、宗教以外の人からもしかすると面白可笑しく、選択肢がないという意味で否定的に見られてきた面もあるでしょう。このあたりも、ぜひ今回先生方のお考えを聴かせていただければ幸いです。

そしてこのことは宗教者や教団だけの問題ではないと私は考えています。東日本大震災後、スピリチュアルケアや臨床宗教が話題になっているように、ターミナルケア・グリーフケア、青少年の生きがいに宗教者

が関わる場面が増えています。そもそも多くの人は初詣や葬式やキリスト教式の結婚式は宗教ではなく習慣だというのですが、そこでは宗教者を中心に宗教儀礼が行われます。見方を変えれば、私たちの生活の隅々まで、要所要所に宗教文化を見て取ることができます。そこでの宗教者の、大変失礼な物言いをお許しいただければ質の問題は、私たちの生活の問題と言っても過言ではありません。習慣とみなされる初詣や葬式や結婚式で、私たちは過去や未来に思いを馳せ、生きるとは死ぬとは何か、愛とは何か、家族とは何か、少なからず考えるんだらうと思うのです。そしてそこに宗教者がいます。宗教者としての助言や寄り添いがほしい、逆に毅然と向きあってもらいたい、いや何か一言でもいいからほしいと思うのは自然なことでしょう。繰り返しになりますが、子弟教育・宗教者の育成というのは、宗教者や宗教教団だけのものではなくて、普段は「宗教なんて」と言っている世俗の人間の、その豊かな生活、そして宗教リテラシーの問題に直結していると私は考えています。

今日は、大正大学8号館新礼拝堂のご本尊様から始まりまして、構内の鴨台観音さざえ堂や、子弟教育の現場である法儀研究のための勤行室ほんぎょうを拝見させていただきました。それでは、自分がどんなふうにならなかに宗教者になる教育を受けてきたのか、そのあたりと絡めて自己紹介をしていただきたいと思います。まずは岡田さんからよろしくお願ひいたします。

岡田 岡田正彦と申します。天理大学の人間学部・宗教学科で、もう25年以上教鞭をとっております。よろしくお願ひします。

私は、北海道にある天理教の教会の次男として生まれて、信仰は5代目です。天理大学宗教学科の出身で、さらに天理教校本科という教師養成のための教育研究機関——当時は研究課程だけでしたが、現在は実践課程が併設されています——で学びました。本科の在学中に「天理大学が改組する際に、教員を目指してみないか」ということになり、「神道と仏教どっちを勉強したい？」と訊かれて、「仏教のほうに関心があります」と答えると大正大学の大学院を勧めていただきました。修士課程を修了後、博士課程に進んでからアメリカへ留学し、最終的にはスタン

フォード大学でPh. Dを取って帰国し、天理大学に奉職しました。

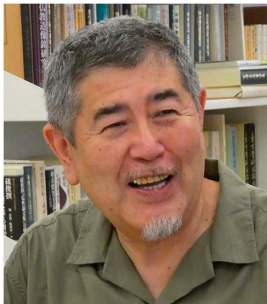
子弟教育の関係でいうと、天理大学では宗教学科だけではなく全学のプログラムとして「伝道課程」(1962年設置)があり、それに登録して指定の単位を取得すると、**教人**(教師)の資格が取得できるようになっています。

弓山 ありがとうございます。では、小平さんお願いいたします。

小平 小平美香と申します、よろしくお願いいたします。

ご本尊様をお参りさせていただいた感想から申しますと、大正大学に今回初めて伺わせていただきましたが、学生さん方が御仏の前で授業を受講されるというお話をうかがって、非常に素晴らしいと思いました。

私は両親とも神職として奉仕する神社で育ちました。神道系大学には進学せず、学習院大学を卒業後、金融関係の企業に就職しました。会社では人事部門に配属になり、採用や研修を担当する人材開発室という部署で働いていました。その後、結婚を機に学習院大学の教職課程(現・文学部教育学科)で3年間副手となり、夏休みにはじめて神職資格(直階)を神社庁の講習会で取得しました。この講習会を受講して神道や神社のことを、もっと知りたいと思いました。それで國學院大学の「神道学専攻科」で、一年間みっちり勉強することになりました。この専攻科での勉強がとても面白かったので、さらに学問として神道を勉強してみ



岡田正彦(おかだ・まさひこ)

天理大学宗教学科教授。1962年生まれ。天理大学の教員として教育・研究に従事しながら、長年サークルの顧問として学生の信仰活動やボランティア活動をサポートし、教師養成の機関である天理教校の教育にも携わってきた。天理教を信仰する教員がつくる「道の教職員の集い」の活動も続けている。

たいということで、大学院の進学を希望したのですが、「勉強よりも早く跡取りを」という先生からのアドバイスもあり悩みました。結局学習院大学大学院の哲学専攻に進んで神道を学び、現在國學院大學では兼任講師として神職課程の教学に関する授業を担当させていただいています。

弓山 ありがとうございます。では、林田さんお願いします。

林田 大正大学の林田と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

本日は私どもの大学にお運びをいただきありがとうございました。お参りいただいたご本尊様は、本学が有する唯一の重要文化財ということで、素敵な仏様のもとで、うちの学生さんたちは4年間見守られて卒業していくということであろうかと思ひます。その後お運びいただいた「さざえ堂」は、近隣の方にはたくさんお参りをさせていただいて、そこで毎週必ず法要があつて、適宜イベントが組まれているところでございます。天台宗から浄土宗までの勤行室もご覧いただきました。お坊さんの資格を取る学生さんたちが、毎週、授業で6コマ以上必ずあの教室で勉強しています。

私自身のことを申し上げますと、私自身もお寺の子で、小学生の頃から、夏休みになると父に言われてお経の練習を毎日勤めておりました。けれども大学は慶應義塾大学の法学部に行きました。浄土宗には大正大学と佛教大学のほかに養成道場があり、他大学に行った者はそこでも資格が取れるということでしたので、そちらに参りました。3週間3回のプログラムを終えると、増上寺ないし知恩院さまで、最後の「伝宗伝戒道場」という行を受けることができます。私はそれで、大学3年生の12月にお坊さんの一番下の資格をいただくことができました。

一方、法学部では3年生で憲法のゼミに入つて勉強をするようになりました。仲間に元気な友人が多く、もちろん、半分以上は無宗教で、「宗教なんて何の意味があるの？」みたいな感じの人が多かつた。毎週、ゼミの後には三田で飲み会があつて、宗教論戦でかなり戦つたんですけ

ど、なかなか太刀打ちできないような状況でした。

残りの半分は、創価学会の学生さんが2～3人おられますし、原理研究会の先輩も後輩も同輩もいましたし、あとは神道の理論右翼みたいな方もいました。一つ下には幸福実現党の初代党首を務めた饗庭くん（現・あえば浩明氏）、二つ下には創価学会の学生部長がいました。創価学会の友達は何人かいたので、何回か学会の会館に行かせていただきまして、ご存知のように車座になって折伏の体験談などをお互いにする。折伏の体験だけだと思ったんですが、お医者さんや看護師さんが来て健康講座をやっていたりして、「すごいな」と思いました。創価学会の友達は日蓮聖人の御書を必ずカバンに入れていて、真っ赤にしながら勉強しておりました。友人には外交官や弁護士になるという学生が色々といいましたが、30年ほど前ですから池田大作さん（2023年11月逝去）もお元気だった頃で、彼等が学会の会合に行くと池田さんとかがお話しなされて、肩叩かれて「がんばれよ」と言われて、それで友人はその次の日はすごく元気で、「今日は2時間お題目を唱えてから勉強するんだ」と言うんですね。「私も浄土宗でお坊さんの資格をもうすぐ取るのだけれども、きちんと勉強しないと彼らに追いつかないな」ということをすごくひしひしと感じまして、「大正大学であらためて浄土宗の勉強をしよう」ということで、勉強しはじめました。

そのようなことで今は研究者の道を進ませていただいております、浄土宗の学監がっかんという役目も仰せつかっております。毎年、大正大学で35人ほど、佛教大学や養成講座と合わせて100から120人くらいが、知恩院と増上寺で浄土宗のお坊さんになっていきます。彼らがお坊さんになるところまで、しっかり見守って卒業まで責任を持って送り出す仕事をさせていただいております。

弓山 ありがとうございます。ここまででご質問などどうでしょうか。

岡田 林田さんの話を聴いていて思ったことを。大正大学に入学するまで、私には「新宗教」と呼ばれる自分たちの立場について、一般社会か

ら偏見を持たれているというネガティブな意識がある一方で、「“葬式仏教”や神社の初詣に行く人たちとは違って、天理教の教会に来ている人たちは、もっと真摯に信仰を求めている」というポジティブな意識の両面がありました。しかし、大正大学に来て藤井正雄先生（2018年遷化）と出会い、かなり認識をあらためました。私は藤井先生のことをよく、良い意味で「浄土宗ファンダメンタリスト」と呼ぶんですけれども（一同笑）、すごく堅固な信仰心というんですかね、毎日の朝夕の勤行で阿弥陀仏の名号を唱えて祈るような姿勢に驚きました。

伝統仏教の方々の信仰生活は、そういうものではないかと思っていました。「私たちは信仰について真剣に考えているけれど、仏教の普通のお寺では、ただ葬式をやっているだけで、儀式は形式だけだ」と思っていたのです。しかし、「いや、そうじゃないんだ、日常生活のなかにはやはり個々の信仰が活かされていて、祈りを捧げることが毎日の暮らしを支えている」と気づかされました。「葬式仏教」や家の信仰ではなくて、個々の信仰にもとづいて自らの人生に向き合う意識は、やはり浄土真宗や浄土宗、さらには他の宗派の方々のなかにもあるんですね。

弓山 林田さんも、夏休みにお父さんとお経の練習をしていたということでしたね。

林田 私たちくらいのお寺の子というのはほとんど、小学生のときに父親に連れられて、「夏休みだからやるぞー」と言っていて、朝起きると、ご本尊様の前で日常勤行式というのを勤めるんです。子供だと、40日間やっていると普通にすぐ覚えちゃうんですね。小学校のときに基本のお経はほぼできるようになっていました。

弓山 今と昔でも違いますか。

林田 今はなかなかできないというのはありますね。やっている子もいますけれども、少なくなっています。

弓山 岡田さんも小さいときには「おつとめ」を？

岡田 家が教会ですから毎日していました。毎日の暮らしの基盤に祈りの機会があるかないか、その祈りの時間をどのように過ごすのかということが、子弟教育に深くかかわってくると思います。お寺の場合もご住職の子どもだけではなくて、やはり関係のある人たちの子どもたちが、お寺や家庭で一緒に手を合わせる機会はあるわけですよね？

林田 お寺の以外の子供さんが集まるお寺さんはあります。ただ、ごくわずかのお寺さんだと思います。

弓山 小平さんのところはどうか？ お宮さんでもご家族と一緒に、小さいときから手をあわせるような習慣というのはありますか。

小平 そうですね。小学生のときから巫女の格好をして、ご奉仕したり、巫女舞をしたり、子供のときから家族でご奉仕していました。氏子地域の安寧を祈る日々の祭り（日供祭）がありますから「神職は365日休みなしだ」と父から言われていましたね。家族で外食や旅行した記憶がありません。

弓山 留守にできないわけですからね。

養成の流れ① 浄土宗僧侶の場合

弓山 自己紹介をいただき、ありがとうございます。

では続きまして、僧侶・教人・神職になるときには、各教育機関でどういう子弟教育が行われているのか、どのような流れでどういうことを勉強して、どういう階梯で進んでいくのか、そこにもし課題などあれば、お教えいただければと思います。まずは林田さんからお願いいたします。

林田 大正大学仏教学部宗学コースのカリキュラムは、簡単に申し上げますと、基礎部門（基礎仏教学）、応用部門（いわゆるゼミ）、語学系・現代社会系・宗学系（各宗派の教え）などの専門部門、法儀部門（お経の勉強）という形でそれぞれ進んでまいります。今日の宗教リテラシーの話では「現代社会系」が一番メインになるかなと考えております。

将来僧職に就く学生のための子弟教育としては僧階取得科目があり、仏教学科でどの科目をとってお坊さんになっていくのかは、天台宗・真言宗豊山派・真言宗智山派・浄土宗・時宗と、各宗派でそれぞれなんです。浄土宗の場合は、浄土宗が決めた「宗定科目」に該当する科目を、大正大学や佛教大学や養成講座で開講しています。ただやはり、私が学んだ3週間の養成講座だとどうしても授業時間が大幅に減ってしまいますので、そこが課題だと考えられます。大学の方が授業時間がきちんと確保できます。

宗教リテラシーの話として、浄土宗では、浄土学や仏教学によって律師や少僧都といったお坊さんの資格（「僧階」）を取得できるのに対し、いわゆる現代社会の常識、お坊さんとしての教養といった科目も別途学んでいかなければいけないのではないかということで、大正大学では宗教学とか心理学とか仏教社会福祉とかいう科目を取ると、輔教という資格（「教階」）が取得できるようになっています。「現代社会と仏教」は選択科目で、例えば寺院の社会貢献について学んだり、生命倫理の出生前診断、人工妊娠中絶・脳死臓器移植などを扱うものもあつたりします。

私たちの時代は、仏教学や、天台学・真言学・浄土学といったそれぞれの宗学を勉強すればそれでよかったのですけれども、こういった「現代社会と仏教」のような科目を学ばせることによって、彼らに少しでも宗教リテラシーを養成していただくということです。特に、「現代社会と仏教」がどれも選択科目なのに対して、数年前に、すべての宗派の了承をいただいて必修で「実践僧侶論」を開講しました。人口減少社会になって、高齢化や過疎化が寺院の住職として問題になってきたなかで、講師として「お寺の未来総合研究所」の井出悦郎先生、税理士の河村照円先生、臨床宗教師の大島慎也先生、「ひとさじの会」の吉水岳彦先生³⁾

などの先生方に来ていただき、参考書でも『お寺の教科書』（松本紹圭・井出悦郎著、徳間書店、2013年）といった有名どころを用いています。

弓山 ありがとうございます。大正大学のほうでは、今、子弟の割合はどのくらいです？

林田 毎年1,000人受け入れて、宗学コースは70人ぐらい、あとは他の学科にポツポツという感じですが、80人はいないと思いますね。

弓山 実践僧侶論についてもご説明いただきましたが、前提としてまずは、宗学と法儀が両輪というように考えてよろしいのでしょうか。

林田 「行学一致」「行学双修」と色々な言い方をしますが、「行」、広く言えばお経・お作法の練習と、それから「学」、仏教の基本と法然上人の教え（浄土学）です。この行と学を並行して学んで勉強していきます。同じように、真言宗ですと「事相^{じじょう}」が勤行室で加持祈祷などの作法を勉強するもの、「教相^{きょうそう}」が仏教とお大師さまの教えの勉強です。大正大学ではそのように両輪でやっております。

小平 神職課程にも実習はあるのですが、禊のほかに修行と定義されたものはありません。仏教では、修行と実習はどのように位置づけられているのですか？

林田 基本的に、仏様の前でやるもの、浄土宗でいうとお経の練習は、みな「行」と位置づけております。先ほどご案内した4宗派の勤行室では、みな仏様がいらっしゃるので、行になります。同じように、知恩院さまにも増上寺さまにも比叡山さまにも、みんな仏様がいらっしゃいますので、その前で修行すれば行になります。もしいなくても、行という気持ちがあれば行になります。もちろん、先ほどの「学」の授業も、仏様の前でいたしますし、授業のはじめとおわりには、必ずお念仏を称え

ますが、こちらは、実習というよりも、講義になりますね。

岡田 勤行室は大学の施設のなかの一室ですけど、一応、正式なお寺として位置づけられるということでしょうか。

林田 そうですね。宗教法人ではないですけど、気持ちとしては道場のようなものです。

養成の流れ② 天理教教人・教会長の場合

弓山 ありがとうございます。では続いて、岡田さんお願いします。

岡田 天理大学の場合も、先ほどの大正大学と同じように履修科目の一覧表やカリキュラムの指定があります。ただ、伝道課程に関しては必ずしも宗教学科の学生である必要はなくて、天理大学に入学した学生で資格課程を希望し、在学中に必要な単位を習得して卒業の要件を満たせば修了資格が与えられます。これは天理教校に行かなくても、天理教校に行くのとはほぼ同じ資格が与えられる、という感じです。

私が専門としている近代日本宗教史から言うと、こういった資格制度は、明治の「^{たいきょうせんぶ}大教宣布」運動（1870～84年）から始まっています。明治政府は「^{きょうどうしやく}教導職」という宗教家の認定資格をつくるわけですけど、公職としての教導職が廃止された後も、国の指導で各宗派や各教会単位で教師資格を認定するための基準を作ることが、公認の宗教団体の要件になりました。1895年に「教規宗制中に教師検定条規を定むる件」という内務省訓令がだされて、僧侶や神道教師になる人の選定基準が厳しくなります。新しい宗教団体であった天理教の場合は、教派として一派独立するとき、教師になる人たちの教育レベルや「教師」の認定基準が問題になりました。そこで設立されたのが、天理教校（1900年設立）です。それを前身として、現在の天理大学（1925年設立の天理外国語学校を前身とし、1949年大学化）も含めた学校制度ができあがっていきました。

当初は教師養成を目的とした中学校として発足した天理教校は、のちに純粋な天理教の教師養成機関として再編され、「本科」と「別科」が設置されます。「本科」が本格的に始動するのは戦後ですが、戦前にはまず設置された「別科」に希望者が殺到し、6か月の修養期間を経て教師の資格を取得するようになります。戦前に生徒が一番多かったときは、6か月ごとに1万人近い別科生が入れ替わるほどでした。その人たちが生活する場所（修行施設）として、各教会の詰所が整備され、現在の天理市の街並みが造られていきます。その後、6か月から3か月に短縮されて「修養科」になりますが、教師養成の機能は現在にまで継承されています。こういう国の宗教政策と直接リンクして、仏教も神道も含めて、それぞれの宗教系学校が教師の養成機関やカリキュラムを作っていたのだらうと思います。天理教の教師養成制度と教育機関の成り立ちも、こうした歴史的背景を反映しています。

弓山 天理大学には、先ほど見学させていただいた勤行室みたいな部屋もあるんですか。

岡田 あります。元々は大学の中に、礼拝堂と同じような礼拝施設がありました。しかし、天理大学の場合は近隣に教会本部がありますので、大学の中に参拝する場所を造るよりは、教会本部の神殿に足を運ぶほうが良いということになって、礼拝施設自体は閉鎖になりました。ただ、私たちにも法儀と同じように「祭儀式さいぎしき」がありますので、そういう実習は学内の教室を使って学ぶことになっています。それはよく似ていますね。

これは何となく考えているのですが、学校の教育課程に教師養成のカリキュラムを組み込んでいく場合は、さまざまな宗教系の大学のプログラムなどを参考にしながら制度を考えていくので、たぶん相互に情報交換ができたのではないかと想定しています。かつて大正大学に人間学部ができたとき、天理大学が先に人間学部を設けていたので、天理大学に大正大学の先生方が訪問して意見交換をしたことがありました。そうい

う情報交換を通して、宗教系の大学はある程度情報を共有し、カリキュラムのもとになる枠組みをつくってきたのではないのでしょうか。

林田 学生さんが全学で3,000人ほどのことですが、天理教の信者さんはどれくらいいるのでしょうか。

岡田 入学したときに「天理教とどういう関係がありますか」というアンケートを取ると、大体3割ぐらいですね。ほかにはスポーツ関係の人も多いです。

弓山 宗教学科のなかでは、何人くらいが教会のご子弟なんですか？

岡田 ほぼ100%に近い。昔からずっとそうです。受け入れ側はまったくオープンですが、やはり天理教の信仰を前提にした講義や活動が多いので、そうではなく「ちょっと興味があるから」というのでは、居場所を見つけ難いかもしれません。

林田 教人さんとか教会長さんになる人たちは、ほぼ宗教学科に入ってきているのですか？

岡田 いや、宗教学科以外の人も多いです。その人たちの多くが伝道課程修了者の資格の取得を希望します。このため、伝道課程の登録者が毎年100名以上はいる感じです。

林田 天理教校と天理大学の棲み分けというのはどうなっていますか？

岡田 もとは同じ学校だったんですけど、現在は法人そのものが違います。

林田 浄土宗で言うと仏教大学も大正大学も同じ浄土宗のお坊さんに

なって、カリキュラムも基本的には宗で定めた科目を組んでいるのでお坊さんの位も同じですが、天理教校に入るメリットや、天理大学と違う理由はあるのでしょうか？

岡田 天理教校は、英語でのいわゆるセミナー（神学校）のような、本山に付属の学校ということになると思います。神職養成機関（いくつかの神社が設置）や、浄土宗でも本山にありますよね。

林田 毎年、教人さんや教会長さんになる数は、天理教校と天理大学で半々くらいなのですか。

岡田 天理教校の方が、もしかしたら多いかな。ただ、その辺りはどちらかというところ、いわゆる形式的な資格よりは個人の資質のほうが重視される世界なので、あまり何年間勉強したから優れている、という感じではないです。

弓山 祭儀式の授業は、宗教学科に入ると必修なんですか？

岡田 いや、祭儀式に関しては必修ではないです。

弓山 週に何時間でしょうか。

岡田 伝道課程での祭儀式の時間は、週1回です。しかし、おつとめや鳴り物などの練習をすべてやっていくので、通年で30コマくらいですね。結構あるんですよ。祭儀式は、私たちが子どもの頃には神道色がより強く、神殿にも注連縄が張ってありました。しかし、少しずつ神道色が薄くなって、現在は注連縄もありません。かつての「祝詞」は「祭文」になっていますし、この祭文は祭文とも違います。亡くなった方への誄詞も神道的な難しいものではなくて、故人の生前の功績と人柄を現代語で平易に伝えるかたちになっています。そういうふうにして、少しずつ

変わっているんですけど、毎月の月次祭で中心となる役割を担うことが教会長の務めなので、その基本的な祭儀の作法や決まりが分かっていると、教会長としての責務を果たすことができません。そのあたりは、僧侶でも神職でも一緒だと思いますけれど。

弓山 祭儀式は、いわゆる実習という形で、教会本部の神殿で行うこともあるわけですか？ それとも全て大学のなかの施設でやるんでしょうか。

岡田 大学の施設を使って学んでいます。ただし、講師は大学の教員が担当するのではなくて、教会本部の方々に直接来ていただいて、指導をお願いしています。

林田 教人さんというのは、私たちがいうとお葬式であったりご法事であったり、お施餓鬼とかお盆といった年中行事を執行する、お坊さんのように位置づけられているという理解でよろしいのでしょうか？

岡田 教人はその文脈で言うと、お坊さんになる資格を持っている人ということですね。最終的に教会長になるためには、さらなる講習と資格検定があります。葬儀式などもありますので……。

養成の流れ③ 神社神職の場合

弓山 ありがとうございます。最後に小平さん、お願いいたします。

小平 神職養成機関のある大学は、皇學館大学・國學院大學です。平成14年に國學院大學の文学部神道学科が神道文化学部になりました。広く宗教・文化としての神道を学ぶ学部ですので、必ずしも神職資格をとらなくても良いのですが、せっかく入学したのだから神職資格を取ろうという一般家庭の学生さんが多くいらっしゃいます。

先ほど岡田先生のお話にありました祭儀式とか法儀は、神職課程では

「祭式」がこれにあたります。大学には祭式教室というのがあって、神殿に見立てた大きな模擬神殿の扉が3つ並んでいます。祭式の他に祝詞作文の授業もありますが、祭式の授業の中で祝詞を奏上することはあっても、祝詞奏上、唱え方の授業はありません。祝詞の唱え方は神社によってかなり違います。大学では抑揚を全く何もつけずにそのまま、棒読みで習います。神職子弟の場合は親の祝詞を聴いているのでだいたい分かるのですが、大学ではじめて習ってそのままぼんと現場に出た神職さんは、どのようにも染まれる一方、どういう風に祝詞を唱えたらいいのか、最初は戸惑うのではないかと思います。

神職課程の授業の特色としては、祭式と神社での実習が挙げられると思います。祭式はお祭りの作法を学びます。実習は伊勢神宮をはじめ各地の神社で行うものです。國學院大學では、まず明治神宮で実習を行います。学部以外にも、神職子弟の教育制度として4年生の大学を卒業してから入学する神道学専攻科や、高校を卒業して神社に住み込みながら夜間学ぶ別科というようにいくつかの課程がありますが、根幹となる授業は共通しているはずで、神道文化学部には、卒業と同時に指導的な神職として活躍する人を育てる「明階総合課程」というのがあり、先ほどの林田先生のおっしゃっていた「実践僧侶論」のように現代の神職に求められている課題を考える授業もあります。私も現場の神職という立場から、現代の神社・神職を取り巻く問題を取り上げるようにしています。

弓山 実習はどのくらいの期間やるんですか？

小平 在籍する課程によって実習の数も異なりますが、一度の実習は3泊から4泊くらいでしたね。私の時は明治神宮で基礎集団実習というのが最初にありまして、なかなか厳しかったです。夜間参拝といって、夜間ご神前で石畳の上に正座して神拝詞を唱えたり、大祓詞という祝詞を正座して1時間近く唱え続けたり。

弓山 國學院大學に勤務している時に、一夏ずっと白衣を着た人たちが

いて、大変そうだな、期間が長そうだなと思ったんですけど。

小平 それは講習会ですね。夏の間、神職資格取得のための講習会を大
學が開催しています。取得する階位によって期間も異なりますが、1か
月から3週間で資格が取れるというものです。仕事をしながら取得でき
る大阪国学院の通信教育など、いくつか資格を取る方法があります。最
初に私が神職資格を取得したのは、東京都神社庁が開催した直階講習会
という、神職子弟や家族を対象にした講習会でした。

弓山 各都道府県の神社庁が講習会のカリキュラムを持っているとい
うことですか？

小平 そうです。各都道府県の神社庁に研修所があって開催されています。

弓山 東京都で何人くらいがそれを受講されているんですか？ 数十人
規模なのか十数人なのか。先生が受けられたときには、何人くらいを受
講者が？

小平 年によっても異なりますが、私の受講した時にはだいたい40～
50人位でしたでしょうか。ここ数年はコロナ禍で行われていませんで
したが、ようやく開催されるようになったところです。

林田 先生のお話のなかで、神社ごとに祝詞の唱え方が異なっている
ということがありました。私たちの場合だと浄土宗で統一のお経をあげら
れないと困るので、行のときは必ず宗定の法要を勤めるのですけれど、
そういうことはないのですね。

小平 ないですね。大祓詞を皆で一緒に奏上するということはありますが。

林田 お作法はないんですか。

小平 もちろん祝詞を奏上する共通の作法はあります。

林田 なるほど、控所から神様の前に行って、そこでさまざまなお作法をして、それは同じなのですね。祝詞の上げ方だけ全然違うということなのですね。

小平 はい。祝詞の内容やそれをどういうふうを読むか、抑揚などが違いますね。

岡田 伸ばしたり、リズムとかね。

林田 なるほど、そういうものなのですね。

小平 同じ祝詞であっても違いますね。太鼓の叩き方なども違うと思います。

岡田 個性を尊重するのは、賢いやり方だと思います。それを全部共通にしてしまうと、みんな同じになってしまうので。

小平 一社の故実に則れるように、色をつけないように教えている部分はあると思います。

弓山 先ほどのお話を伺って、お坊さんと違って神社の場合は、取ろうと思ったら誰でも資格を取れるじゃないですか。ちょっと神社に関心があるとか、日本文化に関心があるから神職に資格を取ってみようかな、という人も取れますよね。

小平 そうですね。大学の神職課程を履修すれば、神職資格は取得できます。

弓山 社家じゃないのに取っている人って大体どのくらいいるんですかね。

小平 かなり増えていて、半分以上が社家でない一般家庭の学生さんです。また、神職の求人数に対して、希望する学生数が少ない状況です。地域によっては生活が厳しいこともあり、神職になりたいという人が少なくなってきたのかもしれない。

林田 お寺は、江戸時代からの流れでお檀家さんがいらっしゃいます。もちろん地方は少子高齢社会でだんだん厳しくなっていますが、まだお寺で生活できる割合は高いと思います。それに対して、大きくて名前の知られている神社だと七五三とかの収入があると思うのですが、それほど大きくない神社だと、それだけでは生活できない人が多いような気がするのですね。神社の数のほうが、お寺の数よりも多いですよ。

小平 はい。よく神社の数はコンビニよりも多いと言われますね。

林田 そうですよ。そうすると、神社だけで生活ができる方でないと、大学に行って興味で資格を取るといのは少し躊躇してしまうような気がします。そのあたりはどうですか。

小平 そうですね。資格を取る選択をしていても最近では「福利厚生が



小平美香 (おだいら・みか)

ときわ台天祖神社宮司。学習院大学・学習院女子大学非常勤講師、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所共同研究員、ほか。『女性神職の近代—神祇儀礼・行政における祭祀者の研究』(ぺりかん社、2009年)、「神道における女性観の形成—日本思想史の問題として」(前田勉・苅部直編『日本思想史の現在と未来—対立と調和』ぺりかん社、2021年)など。

しっかりしていない神社には奉職したくない」とはっきり言う学生さんもいます。専業神職が理想という考え方はまだありますが、都内で兼業されている場合も少なくありません。人がいなければ神社は成りたっていきませんから、過疎の問題も深刻ですね。

林田 過日、伺った鳥根県の石見では、長州藩の隣の津和野藩が、明治維新の際にお寺を潰して、神式のお葬式をやっている方も多という話を聞き、そういう地域もあるのだと勉強になりましたが、全国的には、やはり江戸時代以来、お葬式やご法事は仏教が一番強い気がします。そういう意味では、神主さん方の経済的な基盤は大変なんです。

岡田 昔から、地方のお寺のお坊さんは学校の先生や村役場・町役場の公務員を兼務されている方が多いですよ。

弓山 土日に休めるので。

林田 浄土宗の場合、滋賀県のように小さいお寺さんが多い地域では、数百年のあいだにシステムができあがっていて、例えばみな一般のお仕事をしていて、土日だけご法事やお葬式を勤めるという形をとっています。ですから、お檀家さんたちは「うちの住職は、平日は仕事をしている」という前提があります、しかし、そういう伝統のない地域は問題が多いです。あるいは、昔は公務員や学校の先生方がたくさんいまして、「すみません、お葬式で……」と言うと「行ってこい行ってこい」といった感じで柔軟な対応ができたようですが、もう今はそうはいかない。一般企業や役所で、「お葬式行くから休む」とは言えないですよ。結局、就職するところとしては総大本山などの大きなお寺さんや宗務庁といったところになってきています。そうした流れの中で、「前の住職は平日でも勤めてくれたのに、今の住職は……」となってしまうと、そこが本当に難しいところですね。

岡田 お寺自体の兼務も増えていきますよね。私が住んでる地域でも3か所くらい、同じ方が。

林田 大変な状況になってきています。

時代変化のなかで

弓山 ありがとうございます。大体一回りしたということで、各論に移らせていただきます。先生方が受けられた子弟教育と今の子弟教育で、変わらないというところもあるかと思うんですけど、情報化時代で生まれたときから携帯電話が身についているようなご子弟とは、やはり教える内容や方法が違うのではないのかな、と思うわけなんです。先生方が受けられたときと今の子弟教育についてどこが違うのかということで、もしお気づきの点があれば教えていただきたいと思います。

岡田 私からでいいですか。この場合、むしろ変わっていないことが問題になっているのかなと思っています。天理教では「少年会」というのがあって、子どもが自分の教会で、毎日の参拝に加えて地域の人たちで企画した行事に参加したり、夏休みに全国各地の教会から子どもたちが30万人くらい集まる「こどもおちばがえり」に参加したりして、幼い頃から信仰的な雰囲気を楽しむことができる機会が設けられています。こうした育成プログラムは、さらに高校・大学に学ぶ人たちにも段階的に提供されていて——天理教校もありますけれど——、そういうところで個々の信仰心を培っていくかたちがずっと採られてきました。それは、現在もあまり変わっていない。天理教の二代真柱である中山正善氏は、1952年に子弟教育の精神的な支柱として「信条教育」という言葉を作りました。そのあたりの経緯については、最近の成果のなかで澤井真さんが上手くまとめてくれています⁴⁾。このように、一貫した子弟教育活動のかたちが成立するのは1970～80年代ぐらいのことで、この確立したシステムが現在も受け継がれています。しかし、60年近い時間

を経て、さまざまな状況が変わってきました。これからの方向性について、真剣に考えなくてはならない段階になっていると思います。

弓山 岡田さんは、学部長として新しい科目を立講するとしたら、どういふ科目が今の子弟教育に必要ななってきますでしょうか。

岡田 それは当然、社会活動のような実践的な側面を取り入れていくことでしょうね。それこそ『現代宗教』でもしばしば取り上げられているような、地域社会における宗教施設や組織——天理教の教会を含む——の役割などについて、もっと具体的に学生たちに考えてもらえるような、工夫が必要だと思っています。

弓山 ありがとうございます。

林田 先ほど、こどもおぢばがえりに30万人いらっしゃるというお話がありました。大正大学のある巢鴨（天理教東京教務支庁も所在）では、昔は法被を着た信者さんをたくさん見かけましたが、人数的にはどうですか。

岡田 それ（信者数の減少）は、どこの宗教団体でも同じだと思います。大事なことは、この状況をどう捉えるかということですよ。必ずしも



林田康順（はやしだ・こうじゅん）

大正大学教授、大正大学総合仏教研究所所長、浄土学研究会理事長、大本山光明寺記主禪師研究所所長、浄土宗慶岸寺住職など。『なむブックス⑬〈私〉をみつめて—法然さまのやさしい教え—』（浄土宗出版室、1999年）、『青春新書 図説あらすじでわかる！ 法然と極楽浄土』（青春出版社、2011年）など、著書・論文多数。

ネガティブに考える必要はないのではないか、という気持ちもあります。

弓山 教団のご子弟以外の方が、天理市に、例えば、観光や修学旅行で訪れるということも、もっとポジティブに捉えた方がいいということですかね。こどもおちばがえりに天理教のご子弟ではない人たちが来るということですよ。

岡田 それ自体が昔から、あらためて言葉にはしていないけれど、社会貢献活動の一環という意識はあったと思います。なかなか、夏休みに子どもの相手をする時間が取れない人たちの代わりに、子どもたちを連れてくるというような……。

弓山 ありがとうございます。岡田さんはあまり変わっていないということですけども、林田さんはどうでしょうか。

林田 そういう意味では、本質的な部分ではうちも全く変わっていないと申し上げられるのかなと思います。ただ、マンションなどで、20年ほど前は畳の部屋が必ず一部屋はあったのですが、今は畳の部屋がないという状況があります。もちろん神棚もほとんどないし、仏壇でさえだんだん減ってきています。そういうなかで、先ほど申し上げたように私たちの時代だと、お寺の子たちはほとんどみな父親に連れられて夏休みはお経をあげていたのですが、話を聴くと、そのパーセンテージがやはり減ってきています。もちろん、最終的にはお坊さんの資格まで育て上げてから送り出しますし、子どもの頃からやっていないからダメだというわけでは全くないのですが、全体的な感覚では、子どものころから宗教的情操が養成されている割合が多いほうが、教団としてはプラスになっていくのかな、という気がしています。例えば知恩院さんですと「おてつぎ運動」という信仰運動を長らくやっておりますし、私の住んでおります神奈川教区だと「夏期僧堂」という実習を鎌倉材木座の光

明寺で実施していて、私も小学校のときに行っており、その頃からずっと続いているお坊さん仲間が多くおりますが、そういったものなどに行ってお互い切磋琢磨しながら進んでいくということが少しずつ減ってきているのかな、と思います。繰り返しになりますが、なければいけないというわけでは全くないのですが、あったほうが、より広い人間関係・社会情操関係が一層育まれるのかな、という気はしております。

カリキュラムについて、浄土宗の場合には比較的に不断に見直しが行われていて、鷲見先生のような方がいらっしゃって、まだ宗教リテラシーという言葉もありませんでしたけれども、「現代社会に関わる科目が浄土宗僧侶には必要なのだ」とおっしゃっていただいたので、カリキュラム的には、他の宗派に比べると充実しているのかな、という気はいたします。しかし、近年は、先ほどの実践僧侶論に代表されるように天台宗・真言宗なども広く受講することを促すようになっているのはありがたいことだなあ、と思っております。

弓山 林田さんのお立場でなかなか言いづらいことなのかなと思ったんですけども、いわゆる家庭教育がおろそかになっているというか、それを経ずに、「大正大学に預けたんだから一人前のお坊さんにしてくださいよ」という話なんですよ。

林田 そうなんです。子どもたちの側からすると色々習い事であるとか忙しいかもしれないし、「この子に跡を取ってもらうためにあまり厳しく言えないなあ」みたいな思いもあるかもしれません。

弓山 ご自坊では何もしなくて、大学に来てから初めてお経だ、修行だっていってもなかなか難しいと思いますが。足袋を履いたこともない子に「はやく足袋を履け」みたいな。やはり日頃からやっていないと急には身につかない。

林田 そうですね。お経の勉強を子どものころからやっている子も多い

のですが、やっていない子は面接のときに、「4月までにお父さんと一緒に朝お経を読む練習をしてきてね、あと、一回お衣を着てみてね、入ってからもやるけれども、入る前に少しでもやっておくといいよ」という話をして、彼らに促しています。

岡田 それは、うちも同じような状況ですね。

弓山 天理大学でも、例えば「みかぐらうた、全部できないんですけど」みたいな子が入ってくるんですか？

岡田 できない人は多いです。だから「入学までには、ちょっと見直しておいてくださいね」とか。ほぼ状況は同じですね。

林田 本当に同じなんですね。

弓山 別席を運んでいる（本部で教えを聴いている）子は？

岡田 それなりにいますけど、運んでいない子もいますよ。

弓山 小平さん、どうでしょうか？

小平 さきほど神社庁の直階講習会を受講した話をしましたけれど、この講習会というのは、昭和36年に東京都神社庁が、資格というよりもむしろ、神道の知識を持っていることが非常に大事だということで家族向けの講習会を行なったことが発端です。この講習会は、神職の奥さん・娘さん・お嫁さんというように、神社の女性たちが資格を取って女性神職が増えていくきっかけにもなっていました。お母さんが神職の資格を持って子どもに神社のことを教えるという、家庭での子弟教育というのが非常に大事だということが前提にあったそうです。今は神社庁と青年会が都内の神社で開催する小学生を対象とした夏休みの子供神社

体験学習というのがあり、プログラムの中には神職の体験もあります。今は広く氏子さんたちのお子さんを受け入れています。もともとは子弟教育の一環で始まっており、神社庁としての子弟教育重視は変わらないと思います。

今日の座談会でいうところの「子弟教育」とは、神社でいえば社家の子弟に限定するのか、それとも社家に関わらず神職を目指す次世代に対する教育という意味なのかをお伺いしたかったですけれども。

弓山 そうですね。神社本庁の場合は必ずしも社家ではない人たちも講習を受けますので、ご家庭が宗教的な環境ではない場合も想定しています。

小平 神社の社会活動としては、「地域」がキーワードになると思います。その土地で育ってきて神職になる場合は良いのですが、神職の子弟でない場合、土地との関係が全くなく、地域の歴史も分からないなかで氏神型神社の神職として奉仕していくのはなかなか厳しいことだと思います。大学だけでこうした教育を行うのは難しいかと思いますので、やはり現場で行われていることを見聞きする体験が大事だと思います。

弓山 必ずしも神職の養成科目の中にはそういう科目があるわけではないですね。

小平 そうですね。國學院大學で観光まちづくり学部が2022年に設置されましたが、観光地でなくても、神社というのは地域の観光資源となりうる、そのまちの特色をもった重要な場所であろうと思います。奉仕している神社では、神社を中心としたまちづくりができるよう力を注いでいるところです。

林田 大正大学でも地域創生学部が立ち上がりました。

小平 そうでしたか。地域とのつながり方は、大学だけではなかなか学べない課題なのかなと思います。かといって、神職子弟だけではなく神職でない家の方にも神社の担い手として支えていただかないと、神社は人手不足で立ち行かなくなっていくと思います。やはり広い意味での子弟教育が必要ですね。

2世問題をどう考えるか

弓山 ありがとうございます。今のお話を聴いていて、家庭教育との関わりにずいぶん言及いただいたわけですが、この話題は、どうしても2世問題を抜きにして語ることはできません。「宗教2世」と言わずに「カルト2世」と言ったほうがいいんだと釈徹宗さんがおっしゃっていたり⁵⁾、逆に宗教以外でも世襲制の問題はあったりするので、ちょっと難しいトピックです。先生方はいずれも、宗教5世だったり、第何代だったり、もしかすると第何十世になろうかと思うんですけれども、宗教2世の問題が1年間にわたって社会で大きく取り上げられているなかで、どうお考えかをお聴かせいただければと思います。

岡田 以前に宗教文化士の集まりがあったとき、この話題になったことがありました⁶⁾。よく「宗教2世」って言うけれど、実際には「教員2世」とか「呉服屋2世」だっているじゃないですか。やはり時代が変わってくるなかで、多くの職種や職業が曲がり角に直面して、厳しい状況になっている。私の同級生にもかつて、文房具屋の子どもや呉服屋の子どもがいて、それぞれ故郷の町では羽振りがよかった。しかし、現在ではそのどちらも故郷の町には残っていません。彼らは子どものころから、家業を継ぐものだと思ってやってきたけれど、世の中が変わってしまって親世代の思惑通りには行かなくなっています。教員である親世代が、子どもに「教員になれ」と言うのは、狭い社会経験を通して子どもの将来について考えるから、なにか押しつけがましくなって、しばしば子どもが苦しくなってしまう。こうした後継者問題は、とくに宗教関係者に

限ることではなく、どの職種や家業の場合も「ほとんど同じじゃないの?」と感じます。

社会との関係については、釈徹宗氏の言うことも一理ありますね。社会的に問題視されるような価値観を強制的に植え付けることは論外ですが、生まれ育った環境のなかで自分の人生を選択していくことは、あらゆる人間にとって避けがたいことです。だから後継者や親子関係の問題自体は、もっと一般的で普遍的な課題であって「宗教2世」といった対象を限定した表現では語りきれないと思います。もし、現代の社会問題として取り上げるのであれば、「カルト2世」の方が良いですね。ただしその際には、すべての宗教者は自らの行動規範が「カルト」と見なされることがないように、つねに厳しく自省する姿勢が不可欠であると思います。

弓山 「農業2世」や「漁業2世」だったらむしろ、美談としてNHKあたりで取り上げられたりするわけですね。

岡田 そうです。だから、問いの次元を区切って考えるというのが、一つの考え方かな。

弓山 林田さんと小平さんは神社や寺院を継ぐにもかかわらず、そもそも宗教立ではない大学(学習院大学・慶應義塾大学)に進学したという



司会・弓山達也(ゆみやま・たつや)

東京工業大学教授。法政大学、大正大学大学院に学び、博士(文学)。國學院大學・立教大学・聖心女子大学・聖学院大学非常勤講師、大正大学教授などを経て2015年より現職。著書・共著に『天啓のゆくえ—宗教が分派するとき』(日本地域社会研究所、2005年)、『平成論—「生きづらさ」の30年を考える』(NHK出版新書、2018年)など。

ことは、何か違う道を考えていたわけですね。

林田 そうなんです。私の場合には、「坊主丸儲け」だとか「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」などという言葉が世の中に広まっていて、「葬式仏教」という言葉も、本来的には大切な言葉だと思うんですけども、揶揄的に言われていて、宗派を超えて、みな、高校までに色々なところでそうしたことを聞かされながら育ってきているわけです。そうした意味で、彼らがそれでもお坊さんを目指そうとして大正大学に入ってきてくれたり、あるいは大正大学でなくても養成課程に入ってきてくれた子たちというのは、私としては「よく来てくれたな」という想いでいっぱいなんです。彼らも、仏教に対する「坊主丸儲け」といった言葉をマイナスイメージとして聞かなかった子なんて一人もいないわけです。でもそのなかで、お父さんの姿を見たりお母さんの姿を見て入ってきてくれる彼らの想いをしっかり育てていきたいな、というのが、私の今のスタンスです。伝統仏教は、門戸を広く開いて募集はしていますけれども、たくさん来てくれるわけではありませんので、お寺に生まれた子供たちを金の卵として一所懸命育てていくことが基本であり、一所懸命に育てていくことが大切だと思っています。おっしゃるようにオウムであったり統一教会であったりエホバであったり、実に多くの問題が山積していることは承知していますし、2世3世が社会的な問題になるようなところも多くあります。しかし、そうではなくてきちんとした教えに基づき、社会的にきちんと認められたお仕事であれば、歌舞伎だってお魚屋さんだってお豆腐屋さんだっておみんな代々やっているわけですから、きちんと育てていくというのが大切だと思っています。その伝統を大切にすることが、保守ということなんだろうなあと考えております。

弓山 宗教2世に関しては「宗教2世文学」というジャンルがあるくらいに漫画がたくさんあって、私も読むのですが、宗教2世の問題として漫画で批判的に描かれているのは、価値観や精神性への侵害だろうと思います。例えば魚屋の息子が魚屋になっても「俺のハートはロッカーな

んだ」とか、大工になっても「ボクサーとしての牙は抜かれてないぜ」というように、職業と価値観や精神性は分けて考えられるのに対して、宗教2世は、信仰が価値観であるとか、精神性であるとか、生き方全てに大きく関わっていて、価値観や精神性を強く束縛するところが、「歌舞伎2世」とか「床屋2世」といった他の職業の2世は違った、社会からの批判がされているのかと思います。

林田 浄土宗や天台宗・真言宗の場合には、先ほどの実践僧侶論ではありませんが、浄土宗のお坊さんがロッカーになっても構わないし、事業を始めても構わない。お医者さんになることもできますし、社会福祉の活動をしたり、色々な仕事をしていただいても全く構わない、という大前提があります。それはそれで構わないのです。浄土宗では「教学・布教・法式」と言うのですが、教えを勉強する教学、一所懸命法話の勉強をする布教、お経を一所懸命勉強する法式、これが基本だと言われていますが、それ以外にも、自分の持てる力をどんどん社会に還元してください、というスタンスで送り出しているのです、音楽やっているお坊さんも多いです、色々な社会活動をしているお坊さんも多いのかなと思っています。

弓山 そういうところがやはりカルトと違っているということなんですかね。

岡田 それはすごく難しい。「カルト」と「カルトじゃない」という差異をどう線引きするのか。弓山さんが言いたいけれど、ここでははっきり言っていないところで、やはり微妙なんです。天理教だってその活動をどう捉えるのかは、判断する人の見方に依って変わってくる。だから「カルト2世」という言葉を使うのは難しく、「ここまではカルト」であり、「ここから先はカルトじゃない」と線引きして、はっきり公言できる勇気があるのなら言ってもかまわないけれど、そんな線引きをしたら、これは大変なことになると思います。こうした線引きは、

当事者が自省のために意識することであって、部外者が勝手にレッテルを貼れば、とても暴力的な定義になる。だから、それは簡単には言えないわけで、微妙なところですよ。

弓山 小平さん、どうでしょうか。宗教2世・カルト2世の問題について。

小平 宗教2世というと、ご両親が熱心な新宗教の信者であることに對して、疑問や悩みを抱えながら、信仰から一步距離をおいて学問として仏教を学んでいた学生時代の友人を思い出します。信仰が親から子へ何代も続いていくということは、宗教組織としては誉れである一方、継承に選択の余地がないというのは伝統宗教でも問題でしょう。神社の家に生まれても継がない、長男が継がなくて長女が継いだという話も聞きますし、神職子弟であっても強要できるものではないと思います。

岡田 それで、今日は宗教教育について話をしようと思っていました。天理大学の宗教学科では、教職課程で教科「宗教」の資格が取れるんですよ。天理教の子弟教育としての「宗教」の科目は、天理高校・天理中学校などの系列の学校における天理教の教義や歴史の学習を指導する教科です。「宗教」というよりは「教義」の科目なのですが、それでもこの教職課程の指導では憲法の第20条（信教の自由）と、それに基づく旧教育基本法の第9条（宗教教育）⁷⁾を大事にしています。その場合に一番重視しているのは、「信仰しない自由」を認める指導の姿勢です。あそこで強調されている「信教の自由」の大前提には、特定の宗教を信じる自由と特定の信仰を強要されない自由の両方があります。そのことを踏まえていないと、「宗教」の授業はできません。

だから、私は学生に「教室のなかに天理教とは関係のない人がいても、“あなたはこの授業に関係がないから、出ていってください”とは言えないこと、あるいは信じないことに否定的な姿勢をとることもできない」ということについて、かなり時間をかけて伝えています。宗教系の私立

学校であっても、憲法の第20条と教育基本法の第9条をもとにして運営されています。たとえ、各宗教の伝統に基づく宗派教育は認められていても、宗派教育が認められていることは、決して特定の信仰を強要することが認められていることではありません。「信じない」という選択肢を認めたとえで、「私が信じている価値について、あなたはどのように考えますか」と問いかける姿勢が大前提です。もちろん、私自身もこうした姿勢を大事にしています。

林田 「カルト」についてはさまざまな定義があるのですが、その一つとして、選択の自由がない、あるいは、非常に狭い、ということが大きいと考えています。そういう意味で、浄土宗のお坊さんにならないという選択肢ももちろんあります。ですから、お坊さんの道を歩み始めた子たちを「えらいな」と言って褒めてあげることが大切だと考えています。お友達から「坊主丸儲け」「葬式仏教」などと言われた経験のないお寺の子などいません。しかし、お父さんやお母さんの後ろ姿を見て、あるいはお檀家さんからさまざまな言葉をかけられて、「お寺は大切な仕事なんだな」「お坊さんは尊敬されているんだな」などということはどこかで思っているはずなんですね。もし、例えば「あんな親父になどなりたくない」「こんなところにいるのは嫌だ」などと思ったら、後を継ぐという選択肢は出てこないですよ。カルトではないので。お寺を出ていくという選択肢は充分にあるのですが、お坊さんの道を歩み始めた。もちろん、「お坊さんになるつもりはなかった」などという子もいますが、三つ子の魂百まで、でして、どこかにお寺をプラスに思ってくれているから、曲がりなりにも、この道を歩み始めてくれた。そういうところが大切だと感じています。こうしたことは、それこそお魚屋さんでも床屋さんでも、基本は同じなんだろうなと考えています。

弓山 ある種、宗教リテラシーとも関わってくるんですけども、よくありがちな「なんぼのものじゃい」と言って出ていって、違う職業とか違う価値観に触れて、自分の自明としていたことを一旦否定して、「でも

やっぱり、帰るべきところはここなんだ」ということで戻ってくる強さが、宗教者としての強さにもつながってくるし豊かさにもつながってくるのかな、と思いますよね。

岡田 やはり偏見は、変えてほしいと思いますよね。普通に考えてみたら分かると思うけど、普通に結婚して普通に子どもが生まれて親になったのに、その子どもに「地獄に堕ちる」と脅すなんてことは考えられない。普通は「この子に幸せになってもらいたい」としか考えません。ましてや、子どもに呪いをかけるような言葉は使わないですよ。「宗教団体に属している人は、そういうことを考える」と思うことがおかしい。

弓山 それは冒頭で言ったように、多くの日本人は宗教的な家庭のことを知らないので、何か特殊な考え方に支配されていて、「家を継がないと地獄に堕ちる」とか親が言うんじゃないか」と考えてしまうのだと思います。

岡田 私たちの子弟教育は、あくまでもその人の幸せを願い、どの人にも幸せな未来を見つけてほしい、という姿勢を大前提にしています。無理矢理に信仰を強制して、選択肢を与えないというのはおかしいし、そうではないはずですよ。

弓山 では、このあたりはゴチック体にして強調して記しておきましょう(笑)。

宗教者にとっての宗教リテラシー

林田 かつて、ハーバード大学に留学経験のある戸松義晴さんと話をしたとき、ハーバードをはじめとする神学部から派生した大学は、すべて大学院に宗教者の資格課程があると教えていただきました。つまり、法学部であったり商学部であったり、さまざまな勉強をして、多くの友達

と触れて、あるいは社会に出て、それから大学院で神父さんなり牧師さんの資格を取っていくというのです。わが日本も、そのようにすることができればいいのだろうなあ、と今でも思っているのですが、現状ではなかなか難しい。そういう意味では、先ほども申したように、宗教者としてのリテラシーを育てられるような授業を4年間のなかに組み入れていくのが、今の私たちができる精一杯のところなのかなと考えています。

弓山 宗教リテラシーには2つの面があるのではないかと思います。一般の人が宗教的な知識とか宗教的な文化のことを分かって人生がより豊かになるということも宗教リテラシーのなかにあるでしょう。それに加え、林田さんが何度か言及されていたように、宗教者が他宗教のことや、宗教以外のこと、例えば福祉とか看護とか医療とかを知ることによって、より深い宗教的な素養を身につけることも宗教リテラシーかなと思っています。

実践僧侶論は、必修になったと聞いて驚いています。私が大正大学にいたときはそうではなかった、むしろ受講生はそう多くなかったと記憶していますが、必修化に際して抵抗はなかったですか。

林田 「仏教や浄土宗の勉強をすればそれで立派なお坊さんなんだ」という思いがずっとあったのは確かですけど、それにプラスアルファで学びを深めるということは、そもそも江戸時代の僧侶養成に遡ります。江戸時代の僧侶養成機関である檀林では、3年で一段階で9段階の学びを進める「九部宗学」というシステムがありました。このなか、8部までは浄土宗・仏教の教学が中心なのですが、最後の9部目は「無部」と言って、何を学んでもいいというものです。最後の3年間で、例えば絵が好きな方は絵を、天文学が好きな人は天文学を、それぞれ勉強するんですね。そういうお坊さんが日本全国に散らばっていくことによって、各地方で寺子屋などができあがり、広く多くの人々の教育に携わり、高度な日本文化が育っていったのでしょうか。

そういう伝統を浄土宗では受け継いでおりますので、鷲見先生のような先生方が、宗教者のリテラシーを涵養する授業を組織づけてくださったのでしょうか。そうした浄土宗の形が、天台宗や真言宗にも、「こういう授業をやりましょうよ」「分かった」ということで、カリキュラムの見直しを図りまして、全宗門の学生さんが、実践僧侶論を必修で勉強するようになったということです。先ほど見ていただいたように、臨床宗教師の紹介や宗教法人の税務など、全14コマのなか、実に色々な講義を展開しています。

弓山 学生からのウケはどうですか？ 例えば、東工大でいうとリベラルアーツにすごく力を入れていて、社会的にも「博士課程まで教養科目があるなんて、すごいことをやっていますね」と言われますが、学勢調査という2年に一度の学生自身による世論調査をすると、かなりの学生は「やらされている」と思っているのです。「自分は数学がやりたくて入ってきたのに、なんでディスカッションの授業や、宗教学の授業をとらなければいけないんですか」とね。ですので、なかなか理解されないこともあるのかなと。

林田 この実践僧侶論という授業に関してはお坊さんのための授業なので、「宗教法人法的に言うと、卒業したらすぐに責任役員になるかもしれないだよ」「今、少子高齢化が進んで、墓じまいもどんどん進んでいること、お父さんとかから聞いているだろう」などといった調子で声をかけます。彼らはみんな大前提としてそうしたことを知っていますので、けっして他人事ではなく、いま先生がおっしゃったような「数学やりたいのにどうして哲学なんだ」というような意見は、ほとんどないですね。

岡田 むしろ、直接につながっていますよね。

社会貢献と子弟教育

弓山 天理大学の宗教学でもこういう社会参加の授業はあるんです？

岡田 天理大学の人間学部には、宗教学科と人間関係学科があり、人間関係学科には臨床心理専攻と社会福祉専攻と生涯教育専攻があります。現在、学部・学科の改組が進められていますが、基本的な枠組みは変わらない予定です。これらの専攻で学ぶ学生の多くが、天理教の教会の子弟なんです。だから、宗教学科のなかに実践科目を作るよりは、宗教学科の学生が学部共通の資格科目を取ったり、人間関係学科で学ぶ学生が伝道課程を履修したりするケースが多いです。

弓山 前から気になっていたのは、スピリチュアルケア師や臨床宗教師の養成プログラムに神職の方が大変少ないことで、つい最近も神道宗教学会の機関誌に「神道はなぜターミナルケアに携わってこなかったの



大正大学構内にある「鴨台観音さざえ堂」

か」という論文が掲載されて、死とか医療に関わりづらいという議論がなされておりました⁸⁾。

先ほど小平さんは「地域」ということが重要だとおっしゃられて、確かに、まさに地域の核としてお宮さんがあるのは十分に存じているつもりでいるんですけれども、しかしながら、スピリチュアルケアとか臨床宗教というムーブメントに皇學館大学も國學院大學もなかなか乗り切れていない感じがするのは、何か理由があるんですかね？

小平 なぜでしょうか。資格自体よく知られていないということもあるかもしれません。ただ神社は福祉に関わっていないのではなく、藤本頼生さん⁹⁾や、いま弓山さんがおっしゃった、ターミナルケアについて研究されている金田伊代さんのように、神道や神社と福祉の関係についての研究もなされています。

弓山 そうですね。ハンセン病の施設を回っているのですが、必ずお社があって、そうした悉皆調査まで行われています。あるいは皇室も大変力を入れて支援の手を差し伸べられているので、神道と病いやケアとは原理的に無関係とか関わりづらいとかということはないとは思いますが。

岡田 私の住んでいる地域の事例でいえば、最近近くの神社にご家族で移住して来られた宮司の方は、地域社会で色々なことを積極的にやっておられますよ。だから、そういう感じはあるんじゃないですか。

林田 経済的なことは関係ないでしょうか？ お坊さんの場合、副住職の立場などで臨床宗教師の活動を行い、病院に行ったりする余裕が少し多いのかなとお話を聞きながら思いました。

弓山 スピリチュアルケア師の養成講座や資格授与式に出たり、また臨床宗教師の講習会の開催をお手伝いしたり、現場を拝見するのですが、

パッと見て分かるのは、お坊さんとシスターです。臨床宗教師は特に僧侶が多い。

小平 実際に臨床宗教師とスピリチュアルケア師になったという方のお話を聞いたことがこれまでありませんでした。神職にもいらっしゃるのかもしれませんが。

弓山 私のゼミ生で、國學院大學神道文化学部出身で、今は上智大学でグリーンケアを学んでいる学生がいますが、神職は本当に、非常に珍しいと言っています。関連資料に所属教団の名前があって、「神道」と書かれていて、訊いてみたら、その方は天理教の人でした。

小平 残念ながら神職同士でこうした資格取得の話題になったことがありませんでした。関わり方が少し違うのかもしれませんが。臨床ですから現場に出てお話を聞くというということですね。

弓山 病院で傾聴するということですね。

小平 教誨師とか保護司とか、特に地域の中で福祉的な役職についての神職は多いと思います。

弓山 教誨師は多いですね。民生委員とかですよ、神職の場合は。

岡田 なかなか、こうした事業単位ですべての宗教がまとまるというのは難しいですよ。天理教の教誨師や保護司の活動の歴史は長いですし、あれに関しては浄土真宗と天理教がかなりの割合を占めています。

弓山 それと里親ですよ。そういう社会活動と、いわゆる子弟教育との結びつきというのはどうでしょうかね？

岡田 里親の活動などを支援する、教内のプログラムや組織なども充実しています。福祉関係の基礎的な知識を身につけるために、「ひのきしんスクール」という制度が設けられていて、社会活動に必要とされる、さまざまなニーズに応えた実践的な講座が開講されています。この講座を受講することで、ホームヘルパーの資格を取れたり、傾聴やカウンセリングの基礎を学べたりします。こういう基礎的な知識を教会長さんや信者の方々が学び、各地で実践するシステムをもう何十年も前からやっているんですね。だからなかなか、あえて子弟教育に結びつける、というふうにはならない。

小平 今のお話からは少しズレるかもしれませんが、社会貢献と子弟教育ということで話題にしたいのが、公立の中学校が地域で行う職場体験学習です。この受け入れ先となる神社は実は少なくありません。文科省は職場体験学習を「生きる力の育成」とうたっており、公立学校の90%がこの中学校の職場体験学習を実施しているそうです。

弓山 職場体験としてお宮さんに来て、一日神職みたいことをするわけですか？

小平 はい。あくまでも地域の職場ということでの受け入れですが、私たち神職や巫女が日々おこなっていることを体験してもらいます。こういう職場の体験学習でも、神社や神職というのはこういうものだということが少し伝えることができるのかなと思います。

岡田 いい傾向ですね。そういうのが広がっていくと、自然に。

小平 お寺さんではこうした体験学習への関わりはどうでしょう？

林田 そうですね。私が住職をしている慶岸寺では、そこまでの受け入れはありませんが、例えば夏になると捕らえた生き物を自然に戻す「放^{ほう}

生会^{じょうえ}」という法会があって、地元の生麦小学校の生徒さんたちが来て参加してくれます。そして、私が命の大切さをお話するという行事が続いています。とても大切な行事だと受けとめています。

小平 私の奉仕する神社では、中学生の職場体験学習で神社に来たことが一つのきっかけで、一般の家庭から國學院大學で神職資格を取得して神職になった職員がおります(笑)。多くの神社に、小学生が総合学習の時間などで地域や神社の歴史を勉強しにやってきました。こうした機会は子弟教育とは異なりますが、地域の子供達の教育をわずかでも宗教者が担うことにつながっていると思っています。

林田 お坊さん、神主さん、神父さん・牧師さんの全体を100%だとして、例えば保護司とか民生委員とか教誨師とかを担っておられる方が何パーセントで、専業・兼業でこのお仕事をなさっていて、といった統計的な数字を宗教学の先生たちが出していないと、神主さんの数が多いとか少ないとかは言えないのかなと思いました。

これからの子弟教育に必要なもの

弓山 最後に、豊かな子弟教育とは何なのか、現状のプログラムを更新したり、洗練させたりして、よりよい子弟教育にするためにはどんなものがあるか、というアイデアをいただけますと、この座談会を読んだ他宗派の人々が「あ、なるほど」と喜んでいただけることになると思うんですけれども、いかがでしょうか？

岡田 一気にハードルを上げてきましたね(一同笑)。

弓山 他宗派の人はすごく「他所はどうしているのかな」と気にすると思うんですよ。きっと、皇學館の人は「國學院はどうしているのかな」とか、真言宗智山派の人は「林田さんは何を言っているんだろう」と。

岡田 すごく個人的な意見になってしまいますが、よろしいでしょうか。やはり宗教学を勉強したからというのもあるんですけど、ウィリアム・ジェームズ(1842～1910)が言うように、「宗教的経験」が人生を大きく変えることがある、という意識を持つことが重要だと考えています。「士、三日会わざれば、刮目して相待すべし」という言葉もありますが、人は何かをきっかけにして大きく変わります。とくに若い世代の人はそうです。たとえば、野球を一所懸命にやってその指導者に影響を受けて、大きく人生が変わる人もいるでしょう。さまざまなきっかけがあるなかで、やはり私としては、宗教的・信仰的な体験のもつ意味は大きいと考えていますし、信仰活動を通して得た経験が、彼らの人生を支える力になると信じています。とはいえ、指導者として学生を教導くというような姿勢ではなくて、とくに私の場合は、教会本部を中心とした天理市の宗教的な空間のなかで、友人や周囲の人たちとともに祈りを捧げる時間を過ごしながら、自分自身が感じた経験を大切にしてほしい、と思ってこれまでやってきました。そういう意味では、まったく強制なんてありえないですね。この場所とともに暮らしているあいだに、色々なことを自分で考えてみよう、と。そして、その自分自身の見つけた何かが、きっと彼らの人生を支える大きな糧になる、という姿勢でやってきました。

私が指導することは、「せっかく天理で学んでいるのだから、大学に来る途中に神殿で参拝したらいいんじゃないの」とか、「祈りの時間を増やすと、きっと何か変わるよ」といった声をかける程度です。教会本部では、毎朝日の出の時刻に「朝づとめ」がつとめられます。夏場は、午前5:00くらいの期間が続きます。やる気のある学生には「もし4年間、毎日朝づとめの参拝を続けられたら、きっとあなたの人生変わるよ、嘘だと思ったらやっごらん。やってみたら、本当だと分かるから」と言うことはありますね。とはいえ、それは「教導く」というような上からの指導ではありません。ともに同じ空間や時間を共有して、そのなかで感じるものを大切にしてほしい、という感じですね。そういう意味では、恵まれた立地なのかもしれません。

弓山 ありがとうございます。林田さん、どうでしょう。

林田 先ほど、学生たちが、お父さんやお母さんの後ろ姿とか、お檀家さんに可愛がってもらったりとか、そういうプラスの部分が必ずあって僧侶の道に入ってきてくれるという話をしましたが、それこそ、お坊さんとしてのやりがいや生きがいにつながっていくと思っています。大正大学のカリキュラムツリーでは、1年生2年生で仏教学や浄土学の基本を勉強して、3年生になってそれらを人に伝える「伝道学」という授業があります。浄土宗の場合、「五段法」というお話の仕方を組み立てるよう指導します。「讚題・法説・譬喩・因縁・合釈」という形をとるのですが、例えば法然上人の「ただ一向に念仏すべし」というお言葉をいただいて（讚題）、その意味を伝え（法説）、例えるならばこういうことですよと伝えます（譬喩）。そして、因縁話に続くのですが、ここがお説教のもっとも大切なところなんです。例えば、「今まで何か宗教的・信仰的に感じたこととかはないの？」などと尋ねます。すると、例えば「友達が交通事故で亡くなった」とか、あるいは「自分のおじいちゃんが高校生時に亡くなって、“頼むぞ”みたいなことを言ってくれた」とか、色々なことが少しだけ出てくる。そういう因縁話をきっかけにして信仰の大切さを感じ取ってもらい、それを自分の口から人に伝えるということが、逆に自分自身の信仰を育てていくことになっていくんですね。それこそ、この店の餃子が美味しいから、この餃子を他の人に食べてもらいたい、というのと同じように、浄土宗であれば浄土宗の信仰の素晴らしさを人に伝える部分が大切であり、信仰を育てていくんですね。もちろん、高度な宗教体験・人生経験などありません。ちっぽけな体験しかないけれども、そのわずかな宗教体験をしていたことを見つけながら、一所懸命、はじめての法話を組み立てていくんですね。例えば「おじいちゃんが亡くなってすごく悲しかった。でも、こんなにみんなが悲しんでくれて、おじいちゃんって偉かったんだなあ、おじいちゃんが日頃こういう生活をしていたからお檀家の方がみんな泣いてくださったんだなあ、自分もお坊さんになるにあたってこういうお坊さんになっ

ていきたいです」という話をお檀家さんが聴いたら、「うちの若住職もがんばっているなあ、頼もしいなあ」と受けとめていただけるわけです。その上で、最後に「それでは、そんな尊いお念仏をご一緒にお称えいたしましょう」という合釈に持っていくのです。

そういう意味で、彼らがお坊さんとかお寺とか宗教とかというものに対して、自分自身が体験したなかで感じた良い話、素晴らしい話を、ちっぽけなものかもしれないけれど、それを見つけて育て、少しずつ大きくしていくということが、立派なお坊さんになっていくための礎になっていくんだろうと思います。そして、それを一緒に見つけて育てていくのが私たち教員の仕事であるんだろうなあ、と思っています。そうした伝道学などの授業を経て、浄土宗であれば、3年生の12月に伝宗伝戒道場という厳しい行があって、浄土宗僧侶の仲間入りが果たされます。行を終えた後、みんな目に涙を浮かべ、伝巻をいただきながら大本山増上寺の大殿を颯爽と出てくる姿は、毎年私ももらい泣きをしてしまいます。宗教者には、大なり小なりそういった宗教体験が必要なんだろうなと思っています。

弓山 ありがとうございます。小平さん、いかがでしょうか。

小平 子弟教育の一つの事例ということで、現在担当している授業についてお話しさせていただこうと思います。神道に関する様々な勉強をしてきて、卒業を控えた4年生の後期に履修する授業で、自分が「神職として何を伝えたいのか」という神職の自画像を描いてもらおうとしています。グループ学習を経て、最後は一人一人教化活動の企画をたててプレゼンしてもらい、教員も学生も一緒になってどうしたら実現できるか皆でコメントを出し合って考えるという授業です。

「何を伝えたいか」は、結局自分がどんな神職として生きていくのかということとつながっています。お参りにやってきた神社の神職が、良い顔をしていなければ、参拝者の方々への説得力が全くないですよ。皆さんをお迎えして気持ちよく帰っていただくためには、まずは自分も

幸せを感じながら、しっかり生きていかなければいけないということが前提になると思います。神職というのは神様と人々との「仲執り持ち」ということですから、神様のことについて、詳しくなければいけないのですが、神様の方だけを向いていてもダメで、今を生きる人たちがどんなことを求めているのか、神社にどんなことを求めているのかということが分からないといけなわけです。両方に心をよせつつ、自分でしっかり考えていかなければいけないんだよということを、教員というより、むしろ神職として少し先を歩く仲間という思いで学生さんたちに伝えています。

弓山 分かりました。どうもありがとうございます。

先生方のお話を聴いて、やはり体験を自分の言葉で語るというのは当たり前前といえば当たり前なんですが、それが上手いこといくと、自信につながり、それがさらなる説得力のある言葉になっていって、よりいっそうの成功体験につながっていく。こうした言葉と体験のスパイラルを作っていくことが、より豊かな子弟教育に結びついていくのかなと思わせていただきました。そしてそばにいるけど外側の宗教研究者は、もっとという国際宗教研究所は、この言葉と体験の循環のお手伝いをするのが使命の一つなのかもしれません。多くのことを学ばせていただきました。どうもありがとうございます。

注

- 1) 子弟教育との関係では、浄土宗総合研究所による『教化研究』第12号(2001年)の特集「僧侶(宗教的指導者)養成の総合的研究」に、鷲見定信「宗教的人格養成のために」、林田康順「法然上人に学ぶ宗教的指導者像」などが掲載されている。
- 2) 弓山達也責任編集・財団法人国際宗教研究所編『現代における宗教者の育成』(大正大学出版会、2006年)。今回取り上げられる天理教・神社神道・浄土宗の宗教者養成についても関連論文が載っている。

- 3) 吉水氏による近年の活動については、本誌前号の座談会「地域ケアでつながるお寺と「支縁」団体」も参照されたい。
- 4) 澤井真「信条教育とその意義—天理教の宗教教育の成立と展開—」(『天理大学おやさと研究所年報』第29号、2023年)。
- 5) 釈徹宗「宗教・社会・家族のダイナミズム」(横道誠編著『みんなの宗教2世問題』晶文社、2023年)の議論。
- 6) 2023年2月の第6回「宗教文化士の集い」で、櫻井義秀氏が「宗教リテラシーの低下がカルト問題を拡大する——統一教会問題から考えるべきこと」と題する講演を行い、後藤絵美氏がコメンテーターを務めた。
- 7) 2006年公布・施行の新教育基本法では第15条となり、「宗教に関する一般的な教養」の尊重が追加された。
- 8) 金田伊代「神道はなぜターミナルケアに携わってこなかったのか」(『神道宗教』第266号、2022年)。
- 9) 藤本頼生『神道と社会事業の近代史』(弘文堂、2009年)。